

学生の母語としての日本語力について

中道知子

Japanese Language Ability of Native Students

NAKAMICHI Tomoko

- 1 はじめに
- 2 大学生の日本語力の問題点
- 3 母語としての日本語力を測る試験の現状
- 4 日本人学生のための「日本語」クラスの様子
- 5 今後の教育課題

1 はじめに

本稿は次のことを述べるものである。

- (1) 日本人大学生の日本語力について、大東文化大学日本語学科の学生の実状を例として、現在の問題点を概観する。
- (2) 現在、世間で実施されている、いわゆる「日本人のための日本語の試験」を概観し、その問題点を考える。
- (3) 現在筆者が担当している「日本人学生のための日本語演習」において見られる、語彙力の問題を紹介し、今後の課題を考察する。

2 大学生の日本語力

本節では、本学日本語学科の学生の場合を例として、その日本語力について問題点を概観したい。本稿で「学生」というのは、本学日本語学科の学生のことである。

ごく端的な言い方をすれば、学生の日本語力はこの10年ほどの間に、たいへん低下している。低下の具体的内容は、語彙の貧困化がもっとも著しい。一般に、日本語の力の低下について世上よく取り上げられるものは、敬語やことわざ・慣用句の誤用や漢字の読み書きができないことであり、また、文章構成力のなさなどである。しかし、敬語や慣用句や漢字などは、基本的な母語の力がある上に積み上げられる要素であると考えられる。それに対して、語彙の貧困化という

のは、簡単にいえばことばを知らないということになる。そう考えると、基本的な母語の力の中心をなすべき、ことばが乏しいという事実は、学生の日本語力が、非常に根幹的なところで揺らいでいるということになる。

語彙の貧困化という現象を、中道が学生について最初に意識させられた事情は、中道（1999）に述べたように、1998年春であった。その部分を下記に引用する。

ふと不安になったことがある。自分の使っている日本語が、相手の学生（もちろん、日本人）にほんとうに通じているのだろうか、という疑問を抱いたのである。

きっかけは、平成10年度の入学試験の答案を採点したときだった。試験問題は、いくつかの指定された単語を使ってまとめた文章を書くというものであった。その指定単語のひとつに「たわむ」という動詞を入れたところ、これを使った受験生のほぼ100%が、この単語を、「たわむれる」の一部として扱っていたのである。これはまったく予想していなかったことであり驚いたことであった。その後、学部の3、4年生にこの話をする機会があり、彼ら自身の場合を聞いてみたところ、非常に多くの学生が、やはり、受験生と同じように「たわむ」は「たわむれる」の一部として解釈した。「たわむ」を本来の意味で知っていた学生は、自動車運転免許の教本で「タイヤがたわむ、タイヤのたわみ」という文脈でこの動詞を習得していたと言った。

このちょっとした調査の結果、冒頭に述べたようなおそれを抱くようになったのである。学生に対してこちらは普通に話しているつもりでも、その話の中には彼らにとって「知らない、聞いたことがない」ことばがいくつもまじっていて、ずいぶんとつきにくい話になっているのかもしれない。（参考文献1：中道（1999）「学生が知らないことば」）

こういった語彙の貧困化は、その後の観察でもますます多くの例が見られているが、第4節で述べたい。

一方、先に述べたように、日本語力の低下の例としてよく挙げられることわざ・慣用句の知識についても、学生には確かにそういった現象が見られる。

2002年6月のある授業（第4節にて後述）で、ことわざ・慣用句の練習問題を課した。問題の出典は、外国人のための日本語教材で、これは日本語学習レベルの中級後半から上級を対象としたものである（参考文献2）。この中から、身体部位を使った表現（例えば「目から鼻へ抜けるような」）、数字を使った表現（例えば「一騎当千」）、また、その組み合わせを使った表現（例えば「胸突き八丁」）などを中心としてその他に動物を使った表現なども交えて、50のことわざ・慣用句を選び、それらの表現の一部分を空所として、その部分を答えるという方法で練習問題としたところ、正解率が大変に低かった。30人以上の学生がいて、一人も答えられない問題もあった。「角を矯めて牛を殺す」「閑古鳥がなく」「舌先三寸」などがその例である。

さらに、もちろん世間で言われているように文章を書く力についても弱さが見られるが、その底にあるのは、文章を構成する力といったような、高度なレベルの問題というより、語彙力のなさなのではないかと思われる例がある。授業で、文章の文体を練習する機会があった。それは、「話し言葉」文体の文を「書き言葉」に書き改める課題である。なお、ここでは、「話し言葉」は、少し改まった場面の口頭表現で、文末が「です・ます」のもの、「書き言葉」は、不特定多数の相手を対象としたやや改まった文字表現で、文末が「だ・である」のものということにしている。その中に、次のような文を「書き言葉」に書き改めるようにというものがある。書き言葉としてふさわしくない表現を二重線で消し代替表現を記入せよという指示である。

○その作家はパソコン2台を駆使してバリバリと原稿を書くんだって。

この文では、文末の「んだって」という表現を改めるのはもちろんだが、「バリバリと」についても、改めなければならない。もちろん、学生の中には、「バリバリと」が書き言葉にはふさわしくないという意識がない者もいた。オノマトペとしての「バリバリと」なら書き言葉文体の中でも違和感のない場合もあるのでそれに引き寄せられてしまったことも考えられる。しかし、多くの学生は、「バリバリと」は書き言葉としてはふさわしくないという意識は持っていた。したがって、そういう学生たちは、この「バリバリと」に二重線を引いて消すのだが、それに代わるべき表現が書けないのである。例えば「精力的に」というような、さほど難しい表現ではないものでいいのだが、書けない。「バリバリと」によってあらわされる様子を思い描き、それを表す他の表現が、何もでてこなかったということである。このことは、結局は、語彙の乏しさに帰せられるのではないだろうか。

3 「日本人のための日本語の試験」について

日本人を対象とした日本語の検定試験のうち、漢字、ビジネス文書、文章表現に限ったものを除き、日本語の力を総合的に測定する趣旨の試験に限ると、主なものには下記の試験がある。

話しことば検定（日本話しことば協会）

日本語力測定試験（日本語学研究所）

実用国語検定（財団法人 発達科学研究教育センター）

特筆すべきは、この3つがすべて1998年10月から12月の間に登場したことである。この現象は、世間の注目を集め、その様子は、川本（1999）に次のように述べられている。

しかし、今回は、「なにゆえに今、日本語のテストか」が大きな関心の的となった。

特にNHK総合テレビでは小池保解説委員が、それを社会現象として整理し、また、「なぜ日本語力測定試験を嚆矢として十一月の国語検定、十二月の話し方検定が登場したか」を「目白押し」あるいは「測定元年」という表現で「時代の指標」とされた。

第2節で述べたように、中道が1998年春に学生の語彙力の貧困化について初めて気づかされたことを考え合わせると、この1999年の現象（測定元年）は、個人的にも感慨を覚える。

これらの試験の内容はどんなものなのか、日本語力測定試験と実用国語検定についてその出題分野、範囲を参考資料として本稿末に掲げておく。

また、実際に日本語力測定試験に出題された問題は例えば次のような問題である。（「日本語力現状レポート第1回～第6回」）

○問. 取引先の値下げ要求を断りたい、断りの表現として、適切なものを選んでください。

（正答は1）

- 1 「値下げのご要望にはおこたえできません」
- 2 「値下げできないとは言い切れません」
- 3 「値下げは条件次第です」
- 4 「値下げできるかどうか申し上げられません」

○問. 「人にこうしなさいと説くよりも、言い出した自分がまず、そのことを始めるべきだ」という意味のことばは、次のどれか。（正答は4）

- 1 魅より始めよ
- 2 塊より始めよ
- 3 魂より始めよ
- 4 隗より始めよ

○問. あなたは化粧品店でクリーム of 効能を説明しています。最もわかりやすい説明はどれでしょうか。（正答は2）

- 1 このクリームには、美白、つや出し、保湿の三つの効能があります。
- 2 このクリームには、三つの効能があります。肌を白くする、つやを与える、うるおいを保つ、の三つです。
- 3 このクリームにはいくつか特徴があります。肌を白くする、つやを与える、うるおいを保つ、の三つです。
- 4 このクリームには優れた効果があり、肌を白くして、つやを与えて、しかも、うるおいを保ってくれます。

○問. 次の表記のうち送り仮名が誤っているものはどれか。（正答は3）

- 1 少ない
- 2 必ず
- 3 変る
- 4 決める

○問. 「しのぎを削る」ということわざの「しのぎ」とはどういうものですか。

解答方法は、日本刀の各部分の写真が4枚示されその中から選ぶ形式。

○問. 「新陳代謝が激しく、街の様子が一変した」の「陳」と同じ意味で使われているのは次のどれか。（正答は4）

- 1 陳情 2 陳列 3 陳謝 4 陳腐

上記の問題を見ると、出題7分野を見ても予想されることではあるが、ごく基本的な仮名遣いの知識から社会生活における対人的な表現の使い方まで大変広い範囲にわたって問題が出されていることがわかる。このような広い面での満足すべき日本語力はどのようにすれば養うことができるのか、そのことが、教育の面から考えると、大変に難しい課題である。

4 日本人学生のための日本語のクラス

本学日本語学科では、2001年度入学生から適用された新カリキュラムにおいて、「日本語特別演習1」(1年次選択科目)、「日本語特別演習2」(2年次選択科目)という科目を設けた。これは日本人学生のみが履修するクラスである。本学日本語学科は、日本人学生と留学生の定員比率が7:3であって、2000年度までのカリキュラムでは、留学生のみが日本語を外国語として履修し、日本人学生は英語または中国語を履修するしくみであった。これは、いずれも、母語ではない外国語を履修するという意味の科目である。それに対して、新カリキュラムで設けられた日本人学生対象の「日本語特別演習」は、母語である日本語を学習するという意味の科目である。

この科目を設けた動機は、ある意味では本学日本語学科のなすべき教育の見直しとも言うべきものである。従来、本学日本語学科では、高校を卒業して入学してきた日本人学生の母語(日本語)の運用力については、暗黙のうちに次のような前提を持っていた。すなわち、彼らはその母語力は成人としてほぼ完成に近いものを身につけており、なお未熟な部分については、その後の大学生活や社会生活の中で自然に学んでいくであろうという前提である。だからこそ、従来の本学日本語学科の教育内容は、いろいろな科目名に冠せられている「日本語学」「日本語教授法」という名前が示すように、日本語についての知識と研究方法を教授するというものであったのである。言い換えれば、「自然に身につけて自由に正しく運用している日本語を、外国語として見た場合に、そこに働いている言語学的な法則を研究する方法と知識を身につける」ということが、教育目標であったわけである。しかし、このなかの「自然に身につけて自由に正しく運用している」ということを、もはや必ずしも前提にはできない状況が生まれていると判断したことから、「日本人学生のための日本語のクラス」という構想が生まれて実施されたわけである。

このクラスにおける昨年度と今年度前期の経験から、いくつかの話題を紹介する。

1 「いろは歌」を書かせた結果

4月第1回目の授業で学生に「いろは歌」を書かせた。一つは旧仮名遣いの平仮名のみで、もう一つは歌の意味を表すように漢字仮名混じりで書かせた。結果は、34人のうち、下記のようにあった。

漢字仮名混じりで書けた者：1人

平仮名で書けた者：8人(完全に書けた者：5人、一部分間違っただけのもの：3人)

まったくあるいはほとんど書けなかった者：26人

2 小説の中のある語を空欄にして考えさせた結果

学生に「単語に敏感になろう」と呼びかけて、小説の中のある語を空欄にして読ませて、その場面・文脈から考えて、どういう語がいちばん自然でふさわしいかを考えさせる練習をした。

最初にとり上げた作品は向田邦子「身体髪膚」であった。教材例は下記のとおりであり（ ）の部分が教材では空欄にしてある。実際は小説全部を見せているが、ここでは、空欄部分とその前後のみを示す。教材例に続けて解説を記す。

向田邦子「身体髪膚」から

○お出掛けといったところで、せいぜいお手軽な洋食にプリンを食べて帰りに玩具を買ってもらう程度なのだが、よそゆきの服を着られるのも嬉しかった。一人だけ先に（身じたく）を終え、玄関にうち中の（はきもの）をならべた。

〔解説〕「身じたく」がなかなか答えとしてでてこない。上位語の「したく」はすぐ出るが、それ以外の解答を求めると代わりとなるべき次の語が出てこない。

○人差指の（腹）にかすかにさわる左目尻の小さな傷だけである。

〔解説〕指の爪と反対側部位を指す語が出てこない。「指の腹」という表現を初めて聞いたという学生もいた。

○今考えれば随分と不細工な池だったと思うが、笑ったりしたら大変なことになるのは判っていたから、母も祖母も、出入りの人達もひたすら感心して誉め（そやして）いた記憶がある。

〔解説〕「誉めちぎる」と答えるものが多かった。それ以外の語が出てこない。したがって、「誉めちぎる」に比べて、「誉めそやす」はふつう、主語が複数のときに使うというような語感の違いを論ずることもできない。

○ところが、セメントがやっと乾き水を（張った）途端に、縁側で見物していた弟が落ちて

〔解説〕「張る」の用法として「糸を張る」にはなじんでいても「水を張る」にはなじみがないという者が多かった。

○弟は頭でっかちで、その頃の写真を見ると、着物に白いエプロンをした弟は、福助^{たび}足袋の見本のような顔で嬉しそうに縁側に坐っている。グラリと前へ（のめって）当然といった^{あんばい}按配である。

〔解説〕答えとして出てきた語は、まず「落ちる」であり、それ以外の語を求めると、かろうじて「つんのめる」が出た。「のめる」は出てこなかった。学生は、「つんのめる」と「のめる」の違いについての語感を持っていない。

○墜落直後の阿鼻叫喚の騒ぎ

〔解説〕「阿鼻叫喚」は空欄にはしなかったが、学生に「耳慣れない語」のリストを求めたところ、20人もの学生がこの語を挙げた。

○「お前が合格したのはお父さんのおかげよ」お赤飯をよそいながら母が感動した（面持ち）で

いうと

[解説]「表情」「顔つき」しか出ない。

○関東大震災の時、逃げる時は友人の自転車を借りて逃げたが、返す（段）になったらどうしても乗れない。

[解説]「とき」しか出ない。

○効能書きをのべたてた手前（ひっこみ）がつかない

[解説]適切な語が出てこない。

○盲腸の手術跡の真中あたりが一センチほど（はじけて）、透明な水のようなものがしみ出していた

[解説]「傷口や縫い目」について「はじける」という語を使うという言語経験がない。

○この程度の虫食いなら食べられそうな気もするし、気前よく捨てたい気もするし、—— 豆をむくのもたのしみ半分（気骨）の折れる仕事である。

[解説]「^{きほね}気骨が折れる」という表現を知らない。

次に、沢村貞子「私の浅草」を取り上げた。

○「子どもの多いうちは、これでたくさんだよ、ちょっと（見場）は悪いけど、おなかこわすわけじゃないんだから……」

[解説]「見た目」「外見」はでてくるが、「見場」は出なかった。

○お櫃の洗い方が（ぞんざいな）娘たちに、

[解説]「乱暴な」は出るが「ぞんざいな」は学生たちの手持ち語彙になかった。したがって「ぞんざいな言葉遣い」という言い方を聞いた場合、文脈から全体的な意味は通じる可能性があるが、単独で聞いた場合、その意味がじゅうぶんには通じないおそれがある。

○昼日中から、化粧に浮き身を（やつす）

[解説]「浮き身をやつす」はまったく出てこなかった。

○いつも寝坊の父が、もう、ちゃんとひげをそり、縞のよそゆきに紋付きの羽織を着て、長火鉢の前にすわっている。

「おめでとうございます」

（身仕舞）をした母や私たち——小さい弟までが（しかつめらしく）改まって、父の前へ両手をつくと、

[解説]「身仕舞」「しかつめらしい」のどちらも出てこなかった。「身仕舞」の代わりに「身じたく」を挙げた者がいたが、ここは「衣服をきちんと整える」という場面なので「身じたく」では不適當である。

上に挙げた例から見て取れることは、学生の持っている語彙の数が少なくなると同時に、いわば、目が粗くなっているということである。細かい言い分けをするための語彙を持たなくなっ

しまっているといえよう。これは、中道（1999）で、「専用の語が汎用の語で代用され、和語が漢語にとって代わられる様子」が見えると述べたことを裏付けるといえる。

5 今後の教育課題

日本語学科学生の語彙力の低下ということについて、中道が大変危機感を抱くのは、第一に、中道の専門分野における教育が成り立たなくなるからである。中道の専門は、意味論・語義分析であり、母語のそれを手がける上で、母語の使い手としての直感的な語感が大変重要なものであることはいうまでもない。それなのに、4節までに見てきたような語彙力の乏しさでは、類義語分析を例として考えても、意味分析に関する議論は成り立たなくなる。

しかし、学問的な専門性を離れて考えても、母語である日本語が、このように貧弱なままでいいわけではない。そういう意味では、最初に述べたように、日本語学科の教育目標は、一つの転換期に来ているのかもしれないと思う。今までは、教育の中心は「日本語学」にあった。しかし、今後は、「日本語」にも重心をおくことを考えねばならないだろう。

また、この問題は、ひとり日本語学科だけに限らない。学部学科の専門性を問わず、大学教育を受けたような人間の母語は、もっと高いレベルにあるべきだといえよう。

そう考えると、大学における母語の教育というものが、全学的な規模で扱われるべき時代になったと言えるのではないだろうか。その教育が、方法とともに論じられるべきではないかと思う。

参考資料

「日本語力測定試験」の出題分野は、次の7分野である。（川本（1999））

1 文字の知識・運用

片仮名・平仮名・漢字などの知識、その運用、現代仮名遣い・送り仮名などの表記とその運用、外来語の表記とその運用など。

2 語句の知識・運用

単語・慣用句・慣用表現・ことわざ・故事成語・外来語・手紙の用語など。

3 語句運用の法則

いわゆる文法。知識のみにとどまらず、法則運用の実際も確かめる。

4 敬語の知識・運用

待遇表現・敬意表現など。単なる知識ではなく、実際の場面での運用を確かめる。

5 表現の能力

電話での会話、さまざまな社会的な場面での会話などでの表現、短文の再構成など。

6 聴き取り（音声）の能力

音声で伝えられる情報の把握、内容の聴き取り、情報の整理など。

7 読み取り（文字）の能力

長文の内容読み取り。出題文は、できるだけ文学作品を避け、意見を述べる文章、説明する文章などを選ぶ。

「実用国語検定」の出題範囲は次のようである。（「案内板 実用国語検定」）

文章：文章の作成，文章の読解，文章の主題，要旨の把握，文章（段落）の構成，接続語（接続詞，接続助詞）の用法，文体の統一，（敬体と常体，口語体と文語体，話しことばと書きことば，〈文語体については漢文訓読体も含む〉）

文：文の構造（主語，述語，修飾語，被修飾語，並立語，接続語，独立語），句読法（区切り符号）

語彙：語形，語法，品詞（文法的機能，特に助詞の用法），語種（和語，漢語，外来語，混種語），語構成（単純語，複合語，略語），語義（同義語，類義語，対義語，同音異義語，異字同訓語，擬声語，擬態語など〈ことわざ，故事成語を含む〉），専門用語，新語，流行語，俗語，忌みことばなど，意味分野（指示語，人称語，身体語，季節語，自然現象語，感情語など）

文字・表記：漢字（字体〈扁旁冠脚，部首など〉），書体，音訓，〈当て字，熟字訓を含む〉，熟語構成，仮名遣い，送り仮名，外来語表記，ローマ字表記，繰り返し符号

発音：母音，子音，清音，濁音，長音，促音，撥音，拗音，拍，アクセント，イントネーション

待遇表現：敬語（丁寧語〈美化語・丁寧語〉），尊敬語，謙譲語）尊大語，軽卑語，方言と共通語，

付：クイズ形式の出題も加えて，語彙力，漢字力，課題へ適応力を見る。
国語辞典，漢和辞典，百科事典などの利用

参考文献

- 1 中道 知子（1999）「学生が知らないことば」（『大東文化大学紀要（人文科学）第37号』）大東文化大学
- 2 小笠原信之（1992）『分野別・日本語の慣用表現』専門教育出版
- 3 川本 信幹（1999）「『日本語力測定試験』が世に問うもの」『日本語学5月臨時増刊号』1999 VOL.18 明治書院
- 4 「案内板 実用国語検定」『日本語学5月臨時増刊号』1999 VOL.18
- 5 「日本語力現状レポート第1回～第6回」『日本語学』明治書院